
不機嫌な女、余裕のない女

ーロイ・リキテンスタインの 1960 年代前半における女性表象について

高久 馨 (明海大学)

ロイ・リキテンスタインが 1960 年代前半、戦争ものや恋愛もののコミックの 1 コマを引用、クローズアップし、当時のアメリカ社会の日常に潜むジェンダー・ステレオタイプを皮肉交じりに表したことはよく知られている。だが、男が専らマッチョな戦争の英雄や社会に生きる存在として描かれているのに対し、女については、男より多様に表現されているにもかかわらず、これまでの研究では「男の補完物としての、男を待ち家庭を守り家事に専念する女」と大雑把に片付けられてきた。本発表では、女の作品群に的を絞って、1970 年以降アメリカで盛んに行われた言語と性差研究を援用しながら、具体的に女性にまつわるどのようなステレオタイプや性役割が表されているのかを詳らかにしたい。その結果得られた知見は、それらが現代に至っても（現代では日本においても）なお存在し、女性の生き方や日常生活にまわりつき時には抑圧していることを私たちに気づかせるだろう。

《傑作》(1962 年) では、女が無名の芸術家と思しき恋人に向かって“my”、“why”と間投詞を 2 つ用いて、彼の作品を手放して絶賛している。ここでは、些細なことや身の個人的なことに関して、自身の情緒反応としてやや大袈裟に好意を伝えるという、女性に特有と思われる行為が表されている。また《婚約指輪》(1961 年) では、元のコミックでは女が背後にいる男に“IT’S…IT’S NOT AN ENGAGEMENT RING, IS IT?”と訊いているのだが、リキテンスタインは男をより後方に置き、状況に関与していないかのように描くことで、まるで女が独り言を呟いているかのように表した。こうした処理と付加疑問文のセリフによって、「女は自分の言うことに自信や確信をもてない」というステレオタイプと「断定や直截な物言いは女らしくない」という性役割を暗示していると思われる。これらについては、女のセリフに言いさしが多いことにも表され、例えば《OH, JEFF… I LOVE YOU, TOO… BUT…》(1964 年) や《I KNOW HOW YOU MUST FEEL, BRAD…》(1963 年) などにみられる。

なかでも本発表で注意を促したいのは《エディの二連祭壇画》(1962 年) と《看護師》(1964 年) で、この二点には「女が不機嫌であったり余裕がなかったりする姿を見せるのは禁物」という性役割の、いわば例外が示されていると思われる。前者は、エディとの結婚あるいは交際を両親から反対されているがどうしても彼を忘れられないという娘の苦悶が左パネルに文で示され、右パネルでは、機嫌を取ろうと擦り寄る母親をきっぱりと突っぱねる娘が描かれている。ここでは、「恋愛や結婚のことが原因である場合に限り女の不機嫌は許される」ことが仄めかされており、同様に《看護師》(リキテンスタインが描いたほぼ唯一の職業婦人である) でも、仕事の忙しさや大変さに翻弄され、能力的、精神的に余裕のない看護師の表情を描出することによって、「女の真のキャリアである家庭において余裕のない姿は禁物だが、社会上のキャリアでは大目に見てもらえる」ことが仄めかされているのである。